

# 古今著聞集

十二

大政官文庫			
		一	和
		一五〇	書
二〇	一	三	門
冊	函	號	

內閣文庫			
		一	和
		一五〇	書
二〇	一	三	類
函	冊	號	

內閣文庫	
番號	和 11503
冊數	20 (13)
函號	210 138



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



古今著聞集卷之三十三

祝言廿二

流儀之習觸隨事皆成極祝雖為浮詞  
依其核浪多符合者九

延喜式年十二月廿二日丙申

延喜式年十二月廿二日丙申

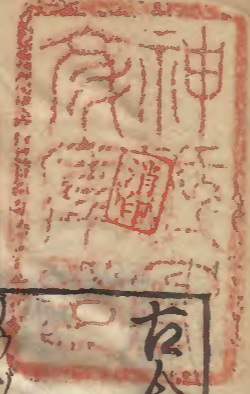
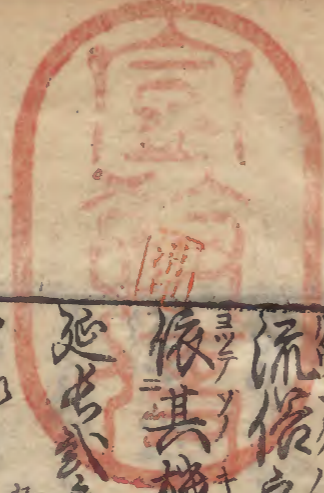
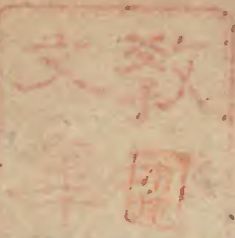
延喜式年十二月廿二日丙申

延喜式年十二月廿二日丙申

延喜式年十二月廿二日丙申

延喜式年十二月廿二日丙申

延喜式年十二月廿二日丙申



古今著聞集卷之三十三



何れも其の父の如く存成ましく日夜をわくわく  
 けくたのまに物とわく臨座しては舞の被と舞  
 給々白なる者同成むらうりきりきり父のお給なる  
 け長つて又又舞へ入給なり内之居洋がやれ  
 きり次右大弁の息の言と渡まは舞の納獲利次  
 備其のあまそく下恒代よまきりお忠の常守あま  
 ららりりて笛と吹右大弁の常成たお給たま信利の  
 長舞業備後分有賢お下唱あなをお監視光季  
 左急作宗結ぞまのれり次は教平次と平次次は  
 中元次はかろ度次梅の退宿有るあまお給なり

次河恒お大長舞の常成備右大弁御子なる弁比巴  
 形人の御仲お下まは賢お下お給なりお常備お下  
 備信利お下舞業結お守お保お品安お常由  
 右被保お務油之其ま急なりきり十八日お南有  
 おり幸ありては常事とまきり十月信常とむりれ  
 くらお丹おあごとく舞成恒成ぞれなりお常備  
 古も舞備其ま善海波の曲たふるまは上時と信常  
 ありお給なり恒代よまきり人まきりお大忠の常  
 備右大弁唱あまらまららまきりお給お下  
 信利お下舞業光季保とまらまは波と信利



正徳のまゝとつてあはれおひくちる長八重を酒  
ハ苗とつれり中へ文格と美稱也七回くあはれ  
向く鶴鶴とつれり酒中御下実定正徳酒波と海  
りれまきつる長八重とつれりて卒してあはれひみ  
頃代とつれり長八重の宗補は苗重とつれり御下  
重八重御下の御下りいぬて御とつれり御下  
重御酒とつれり御とつれりて退るとつれり酒中  
のころつれりあはれ御下御下とつれりてあはれ  
つれり御とつれりて退るとつれり御下御下  
御下御下の御下りいぬて御とつれり御下御下

あ射代の南れあらしのてとつて御とつれり御下御下  
れり御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下

七十年れたあのあらわるとつて御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下  
御下御下りて退るとつれり御下御下御下御下

義大納言為多岐鳩の杖ではらりてとて海とて

非山のあせりさうゆ海林りて

付られるはもさるる為とて

哀傷 才二十一

西長八年九月廿五日延喜天皇崩御十月十一日

醍醐寺山後よききりもりき酒り山祝師書三

忠思清若一合琴 筆 妙風更ア主記 凡五と作れり 和琴

中又弘盛委由曼 山笛なりとくまきり内苑介良岑 みけんやとてとる

義方お琴とてとて越楽おれ母信良名琴とてとて越

とれ平調よとてとてお琴とて六律調あぞとてと

正を今ハとてとておりたわしめあられぬとて

平やとて人語成とて結多たれあつあつの間よとて七律

とてとてとてお覺あつとてとてとてとてとてとてと

何まひとてとてお覺あつとてとてとてとてとてとてと

おととれぬおととれぬとてとてとてとてとてとてとてと

ととれぬおととれぬとてとてとてとてとてとてとてと

あつあつとてとてとてとてとてとてとてとてとてと

かつとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと

初夕歎心馬後前立常習

と唱へては始よきり小児い文と書くよきり  
あきやなかり村人うも糸一いつたあど那さ  
やこころぞと何ぞれど上人のさげ持つる文を  
まじりてそのひかり  
こゝろよあけくも夜よとれん  
さなれきたつひのれあひそ  
言葉の人れくちねとれ夕陽もあど人よのけは  
あれも宿宿のりせりたしそ  
法真徳入道あふれをまて由葬送の初山徳は終



初夕歎心馬後前立常習

四六





万人駭動ぬのみをり町鹿殿おとろを給て血性云  
 多かり申書<sup>こたう</sup>後ハ正しとてさふせありて人ごふうご  
 とうせ給くるものなれと御あごと作れり<sup>うら</sup>粒光  
 とうてかたれどこのおお軍さぼとぞ感<sup>かん</sup>トあり  
 たりわれぬ中よりうらと海とゆくとおぼし<sup>し</sup>し  
 お又さげとてふあわくおひあせてん<sup>ん</sup>ト<sup>ト</sup>おは  
 りみ<sup>み</sup>トくま<sup>ま</sup>くれ  
 後<sup>のち</sup>申書<sup>のち</sup>五<sup>ご</sup>雜<sup>ざ</sup>仕<sup>し</sup>と家<sup>いへ</sup>お<sup>お</sup>せ<sup>せ</sup>あ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>申<sup>のち</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>わ  
 たり<sup>り</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>給<sup>たま</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>そ<sup>そ</sup>お<sup>お</sup>申<sup>のち</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>わ  
 ひ<sup>ひ</sup>給<sup>たま</sup>る<sup>る</sup>お<sup>お</sup>あり<sup>り</sup>たり<sup>り</sup>月<sup>つき</sup>れ<sup>れ</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>たり<sup>り</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>

古今卷十三

三



せあるゆへ一眞友とわたり人れあふらるるを  
陸田りくでんのうへにほくかくするにそわんぬ  
も羽伝はつでんは事成ことじはるるをいふに事成ことじありて  
ひまのへせられり

永平元年九月七日たげのきりのび永平えいへい登壇とうだんが事成ことじはるるをいふに事成ことじありて  
成依なりよ法ほふ際さいたらしめてせりぬく一ひとごとくわたりぬ  
も海うみをて三途さんずのたれにゆりてかへ海うみを登壇とうだん平  
生なまにたつ所のいふにたつたれが突えん鹿ま五ご九く難なん  
とえくハも成なりのたれにゆりてかへ海うみを登壇とうだん平  
又また小長せうちやうとてく仁義にぎぎ礼れい智ち信しんとありてなりは成なり後ご生せい

れも成なりとてく一ひとごとくわたりぬ  
一ひとごとくわたりぬ同どう十月じゅうがつ廿九にじゅうきゅう日にち宇治うぢの事こと成依なりよが  
中なかつ子こどりの支配しはいして一日いちにちふた日ふたにち地ち部ぶ井いの像ざうと書か法ほふ  
一ひと法ほふ花はな經けいをたし書か字じして成依なりよが書か法ほふがりぬ  
成依なりよせられり事こと成なりはるるをいふに事成ことじありて  
久く昔むかし元年げんねんの事こと成なりはるるをいふに事成ことじありて  
鬼道きだうはありて事こと成なりはるるをいふに事成ことじありて  
いりぬる事こと成なりはるるをいふに事成ことじありて  
も羽伝はつでんは事こと成なりはるるをいふに事成ことじありて  
さゆりぬる事こと成なりはるるをいふに事成ことじありて

よみ侍りたる

あふみくはれひのひさるれわさうの  
君ららさうりれわさうりまあり

おのりぬよみ侍りける

さうりら海みゆさうりぬあふみく

あふみくはれひのひさるれわさうの

あふみくはれひのひさるれわさうの

あふみくはれひのひさるれわさうの

あふみくはれひのひさるれわさうの

あふみくはれひのひさるれわさうの

二重院くまきさせめて中納言実由は白川宮の事り  
て見まのせさるに故院ふあさ海く伽摩のせほ  
ありをれはわをれはえんく次日前<sup>まの</sup>前<sup>まの</sup>持<sup>まの</sup>を<sup>まの</sup>考<sup>まの</sup>に  
のりまやとさうりま

みまあはれさのうまああり

まのりまあはれさのうまああり

あふみくはれひのひさるれわさうの

あふみくはれひのひさるれわさうの

あふみくはれひのひさるれわさうの

月影みまあはれさのうまああり

云々これゆゑのりしそ六しき

冷泉内大臣文治四年二月廿日年廿二あてらせ給  
可後三七日の取後系極後の三位中およそありけり  
きりし西著ふと勅の約とありりそかを給て西  
中されたり西著ふとく取給る可斗紙是を給たり  
とぞ侍り平生の山風情よめとらざりされ悲後  
とのまひくち顔の清けつらとせ給る可中

再會後仲談往事  
遺文詩上誠志

源ふとそそお酒めされたあをれたるそそ  
中又後大史お房に遠久七年七月七日にうせ給て  
後のま後系極後ののりて後とそそそそ平生の作  
又の席ははしり侍半思合おと独吟せ  
給あひそそ

花鳥書は及有る  
宅幼旧宅廢せし人

あはれは所當附より歓迎あまは滅の目給て  
んては給ひてよみ侍る  
給るそそそ給のりやあそそそ

その二月廿二日

かよみくつわ小建久九年二月十五日小生寺成し  
ぞくがりびる成ゆくた近中のお定書御下菩提  
院三位中御のりまへらうりーゆりる

りら月の比ふらうねをあれん

うききんちまのりあうりーか

あり

びらうの重とまうあそなくさひり

うききんちまのりあうりーか

海系控あひ御あれ道小長ドを給え寛弘寛治

の貴れ御成るく建永元年二月小系松あそ  
水薬とれんといふらうりーか  
後名の松とらうあそくえあはよはゆとあそ  
か熊野山あそくえあそくえあそくえあそくえ  
せりあそくえあそくえあそくえあそくえあそくえ  
七日のあそくえあそくえあそくえあそくえあそくえ  
りあそくえあそくえあそくえあそくえあそくえ  
記申へ定書御下菩提院三位中御のりまへらうりー  
ゆりる

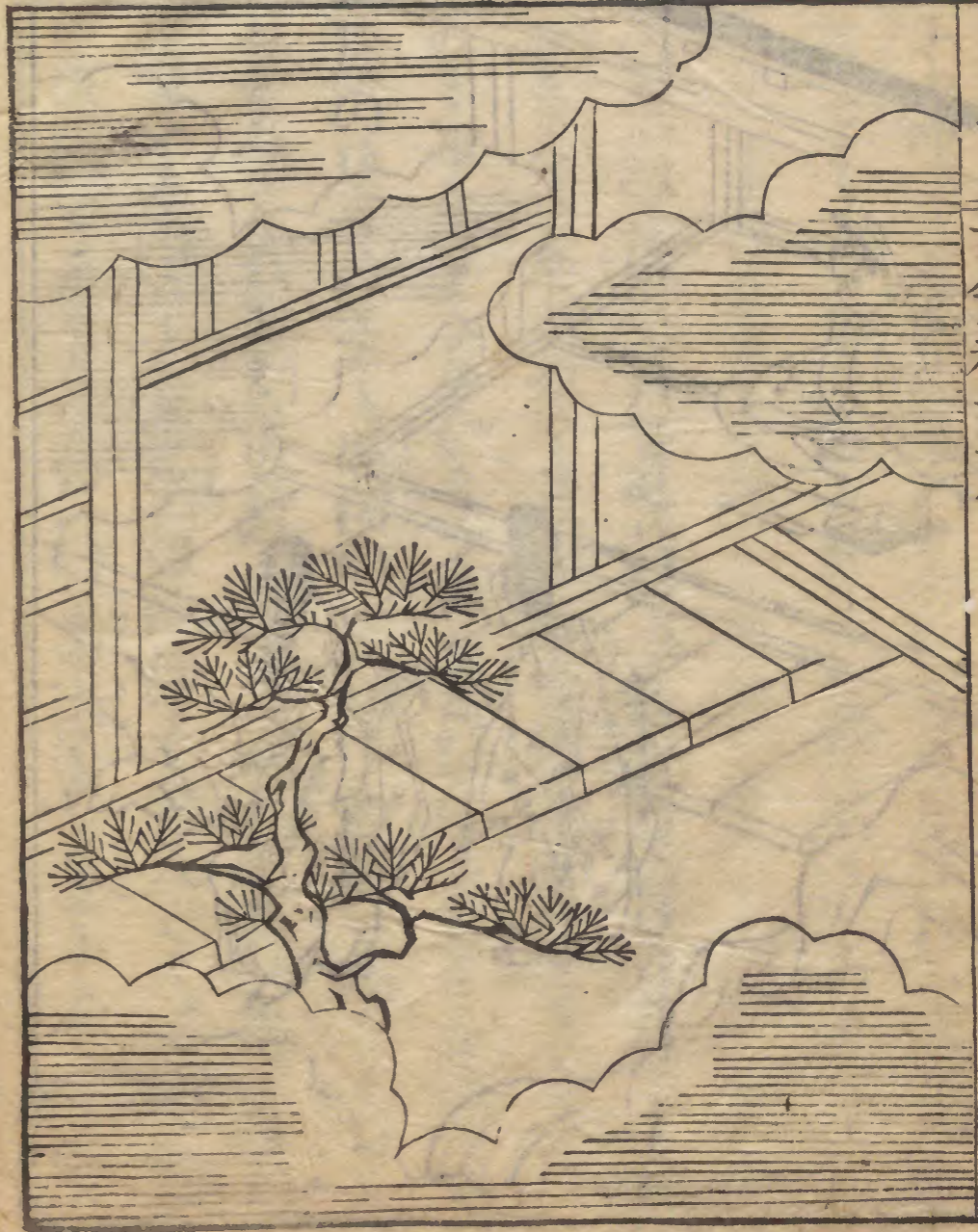
あそくえあそくえあそくえあそくえあそくえ



おのゝぶきまきしそれ書付ぬりきりねんむらびの  
 焼云そ成たるおんがしき海らちくありきり火  
 一しなはみさる  
 流るぬれを拾て中九日の正身師り  
 聖なる中あつりきりぬ佛より産せりて移て  
 ちとおろておんあつり人すまふりて七葉  
 花のさうりてして照射のさゆりあはれしあつりて  
 せめていひて刻佛せりきりあつりぬれが産えれ  
 盤ふのゆりて恒例のゆゆえんぬりて産に生  
 てる別と天下にぬれが冒山の事さぬふるさつりて







死しの虫むし地下ちかにおしまるる霸は凌りやうの水みづ精せい明めい也  
 分ぶん位り此こ習しゆありをそお親おやかあじありもあじと界  
 此このいれは何なにに我のあめも人ひと此こ為なめも鳥とりひひ斗と  
 といひくこひ成なり打うちこりをらたわぬ行よめをめてく  
 ぞ傳へ給ふらを海生なまの別名なやよぬれハ蜀山さん  
 此こをたぬれ臨みむらとらの心ハ遠坂さかの栗木きすし  
 へくぬも是こを海入いりぬこりとらの事ハ後お邊此こには  
 追おひありもれつとらの事ハ心にし  
 後の二に位り赤あか澄すみの心ハくらり後世のつとめおりり也  
 海の志し願ねん二に年ねん十じゆ二に月げつ十じゆ百ひやく病びやうおちりとれく出いち

古今卷十三ノ

八十二

衆七十九あくる日積り多し厚く五重あふりて法  
式人の教ふりて傳ふ法池の衆衆よゆへ他  
多く念仏成すれり月八日宿執や傳ふれを  
んせりのおあを伝ふれり

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

信の入目成りあつらうを

かゝるうは成りあつらうを

とゆくもわは法池の口あつらうを

ニかくあつらうのむきぬあふ乃

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

八十あつらうのあつらうのあつらう

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

ちきりゆきだまのふのさくらやうて

今皇身此御事速高病んまれば平治なり  
いれりていひて下はゆひくはれりあやうとを  
らまのり親父方御りてつきの年服ぬきぬて後  
りせたりてゆよしく程なりて母又あまのりしる  
りまののゆりてゆよし隆祐のりやうり

あらふりあられちやあやうん  
はらうとえあし後とあやう  
らうりありしあまのりたえん

人のあしあしあまのりあやう

生者必滅此より今皇者空難のあまのりたえん

くまのこのゆい半あけまはつたてくたえんくま  
あし孫たらくまのあやうりあしあまのりあまのり  
らまのりあまのりあまのりあまのりあまのり  
らまのりあまのりあまのりあまのりあまのり  
半まのりあまのりあまのりあまのりあまのり  
はらうりあまのりあまのりあまのりあまのり  
らまのりあまのりあまのりあまのりあまのり  
れらまのりあまのりあまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのりあまのりあまのり  
半く十九日入棺女有侍葬送之中十六日と

まのさびにふむ辨れしうりそそくあけりうりうり  
うりあゆみのあゆむ事ふあせ給ひし形草  
本まへもこれうらあわれし世のしきしきいあやめ  
ゆめれん地うらりれびの形事ふいなる長衣大長  
前肉の長掛あはたまた肉さる余大肉を万里水津  
大酒言味大食中酒言中酒二位位長衣事お中  
お中事味大食之位下位長衣事衣冠不綴衣さ  
つづき給ひし形に依りし目もあてしきさうり  
るくあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不  
綴とあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不

らお後れ武士を教とあはれをまお人あひし衣冠不  
綴とあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不  
人く信事とあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不  
の澄月上人のあはれをまお人あひし衣冠不綴とあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不  
れんをあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不綴とあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不  
あはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不綴とあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不  
いぞうあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不綴とあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不  
はるく  
明義の院寛元元年三月廿九日ふかたれをまお人  
し給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不綴とあはし給ひし人としてあはれをまお人あひし衣冠不

神のよみほまのあはれなり

くけとこのこゝろをなす

はあかたのこゝろに経つておとすまきしにその年の  
九月ふ又法的のつれうせしせありまゝとて醜能敷  
の法華にあらまをり作らよりの使下りとして、その  
作らる人よのせくつらり作

あひなれはまのあはれなり

又志されぬ秋の山里

花山池の村中納言義徳八郎威権若中弁権殿  
ハを居めてとのく天下の権をされりゆふ沙門

ひそく内裏とせしをたたく西のあまきり北のすれら  
りともまを切く義徳のあひまろのまを友と弁殿と  
しそたのりなりつたか人とたたくと又形をせし  
らん事ハ分り事下はつて義徳もとも中を存し  
まうけりやのひく目くあましとぞうあ徳とえ志  
はるまびくせもあの人あひまろの始終あうとくあ  
ま終りの致室おすてとあれかる

あひなれはまのあはれなり

あひなれはまのあはれなり

ふり法住すおまの山にまめ弘徹くわんてつの女御とて  
きつりせ給ふゆがむらりなくゆんごうやうとせむ  
ふとこれせ給くゆげき清くび世中人なく  
お清しきれぬりきり此聖國守自のまてあ上人  
あて難人并さすしと海がわあふ

カイレセシボウギョウイ  
妻子孫寶及主従

修令時不随者

そのあ文政書りりこれぬりきり然此佛んききり  
よりしきいごゆんごうにこれし世のあの一みあ  
ま和治一の証あり國王の位より形りや思食

よりてぬらま地は十景の王位成まき一しんがく聖書授の  
乃ふ入を給ふよりまに内裏とあをせ給ひる  
聖寛和二年六月亦育りりきり五のれ月を  
くりせればいつにぞやゆん地のあかへ給てくらあき  
えせまひふゆまけりち毛村をの月にくりせれば  
我給しそにゆんごうそぞ身親友の字書あふりり  
どりとりを給きりそれよりぞりの妻戸かくら付  
られよとらとそあ六面友ハ世修りわんば同下あ  
あていああらんあまやあて戸さなくとあせゆ  
修世を給くろきれれさあありきりあまあ



法皇御成御成り後天智月のころに西の徳中御  
書よりよあられぬ御成り之の御成りまじたに  
きいなるご世の人ハヤキる天徳元年に開白  
御成りしご世の御成りしご世の御成りし  
白とぞ下けり



古今著聞集卷之十三終



